

《書評》

若林正文・家永真幸編 東京大学出版会

『台湾研究入門』

(東京大学) 前野 清太郎

「入門とはなにか」から説き起こし始める「入門」は幾分珍しいのではないだろうか。本書はその珍しい例であろう。本書の編者である若林は「台湾研究とは何をする事であるか」、「それ入門するとはいかなることか」との問いから本書を説き起こしている。もちろんこれは別段奇をてらった故ではない。〈台湾〉なる主体は長い歴史的なプロセスの中で自己規定の輪郭を不安定ながらも形作ってきた。この不安定な対象としての〈台湾〉へと向かい合うに際し、研究者自身が「自らは何者か」を問いつつ、「自らがなす行いは何事であるのか」を模索しながら、やはり不安定ながらも自身の枠組みを形作ってきたのが学問領域としての〈台湾研究〉であった。若林が「はじめに」で記すように〈台湾研究〉とは〈台湾〉を対象として把握しようとする模索そのものである。そして「台湾研究とは何をする事で」、「それ入門するとはいかなることか」は〈台湾研究〉に従事する者が模索にあたって自問し続ける問いである。だからこそ「台湾研究入門」たる本書はこの〈台湾研究〉の根源的な問いから始まるのだといってもよいだろう。

本書は「入門」と銘打たれてはいるが、決して初学者に向けられた概説書としての「入門」書ではない。本書は概説書において一般に概説される〈台湾〉なる対象を、さらに問い直し探究する営みへ読者を「入門」させることを目的とした書なのであって、本書に並ぶ各章はこうした問いと探究の最先端の成果の束である。〈台湾〉を問い求めるための手がかりとして、分厚い研究蓄積をもつテーマから最新の社会・政治的文脈に即したテーマまで、多数のコンテキストが執筆者それぞ

れのアプローチによって本書では示されている。やや手短な紹介となってしまうが、以下に順を追って本書所載の全27章について紹介していきたい。

本書は終章のみの第5部を除くと、大きく4部に分かれている。第1部の各章は、現代の〈台湾〉になお影響を及ぼす日本とその植民地統治がテーマである。第1-1章「統治構造——清朝から台湾総督府へ、国家・社会関係の転換」（新田龍希）は、地域エリートを温存しつつ排除した植民地行政体制のもと清朝統治期以来の官民間の諸回路が整理され、新たな回路を模索する「運動」を生んでいく過程を扱う。第1-2章「台湾法制——同化と差別の根底にあったもの」（浅野豊美）は、大日本帝国憲法下の台湾をめぐる法的位置づけを扱う。浅野は法制上矛盾した位置づけの「植民地」にあつて、「本島人」が属人的な法的対象として内地人・外国人とは異なる存在に位置付けられたことが「台湾人」アイデンティティの形成に影響を及ぼしたとする。第1-3章「近代国家による可視化と台湾、台湾原住民」（松岡格）は土地権の整理、戸籍登録などの植民地政策を統治対象の「可視化」として論じる。しかし同時に、それら植民地政策の遺産には、植民地下の姓名登記と原住民名の回復の例に見られるように、ポスト植民地的文脈の新しい意味が近年付与されはじめてもいる。第1-4章「学校教育」（駒込武）は書院の接収・流用による公学校設立に着目して、「公共」のロジックを駆使した地域エリートの抵抗と、植民地台湾において私立学校の展開が不振であった背景を論じる。第1-5章「在台日本人——日本帝国下の人口移動と文化変容」（顔杳如）は、非エリートを含む「内地人」たちの台湾を軸とした帝国内移動に着目している。帝国内における沖縄と台湾（あるいは他の「外地」）の関係についても本章は示唆が多い。第1-6章「ジェンダー・階層・家族」（洪郁如）は、社会学・文学的視点

をクロスさせながら植民地期「(新)女性」の社会活動を分析する。彼女たちの自己形成には、自立と解放がしばしば国家と同化への接近につながるアンビバレンスと階級性が潜んでいた。第1-7章「「平穏」な籠の中で歌う——流行歌に投影された台湾の戦前、戦後」(陳培豊)は「うた」を対象にした社会史的読み解きを実践してみせる。日台の戦後成長が生み出した日常の共時性、それにともなう日本歌謡への再接近との指摘は、「地域」をまたぐ可能性をもつ独特の視点である。第1-8章「日常生活史」(陳文松)は「日記」という歴史学が古くから用いてきた資料を通じて、多様な書き手の「まなざし」から台湾史における支配と被支配の主体性を分析する可能性を示す。第1-9章「台湾ジャーナリズムについての帝国経験」(谷川舜)は国際間で展開されてきた漢文脈の言語空間が、大衆化による活発な言論空間の獲得と引き換えに台湾サイズ(台湾大)へと収斂する日本植民地期を通じたプロセスを描き出している。第1-10章「脱植民地化の代行——台湾の日本認識に焦点をあてて」(森田健嗣)が扱うのは、台湾を統治した「諸帝国」の記憶の歴史化である。本章はとくに日本の歴史的記憶へ着目して、国民党による脱植民地化の「代行」が生んだ世代的ズレをはらむ歴史記憶の継承と、それによる他者としての日本の位置付け難さを論じる。

続く第2部の各章は、戦後の〈台湾〉が国内的な観念として、同時に国外に実在する他者として向き合ってきた「中国」との関係を扱う。第2-1章「中華民国憲法」(吉見崇)は、中華民国の民主化と台湾化が「台湾地区の自治」として進行了たプロセスを憲法へ着目して示す。そこには戒厳令期(1949年~1987年)にあってすら完全には否定されなかった「憲政」の大枠下でのポリティクスがあった。第2-2章「国籍と戸籍から見る中華民国台湾の境界」(鶴園裕基)は、「国籍」と「戸籍」へ着目した議論である。台湾の空間的領

域に重なりつつもズレをもつ両者は、中華民国と台湾のあいだ、さらにかつては日本内地と外地台湾を結び付けながら隔てることで「台湾人」の「社会的閉鎖」を生み出し、アイデンティティ形成へ影響を及ぼした。第2-3章「中華民国の国歌」(三澤真美恵)は、国民政府成立以来の中華民国の党一国家の密着した関係を象徴する「国歌」が台湾において果たした役割について触れる。三澤は戒厳令期台湾において国歌は国民の身体を規律化する装置として機能しつつも、国家と個人の乖離を示す焦点ともなったとする。第2-4章「国定記念日と祝祭日」(周俊宇)は「国の祭日」をとりあげる。省・国別の祭日設定は、台湾サイズに中央と地方が共存する「中華民国」の現状を前に、両者を統合しつつ区分させる役割を果たしていた。第2-5章「分断国家の正統性」(家永真幸)は「二つの中国」問題について「正統性」を軸にせまる。それは国際法的な国家承継のレジティマシーであるとともに、中華的な「統」の理念をはらむゆえに、故宮・パンダ等のシンボル争奪を引き起こす。第2-6章「一国二制度」(倉田徹)は「二つの中国」問題と結びついた一国二制度の香港・マカオに対する適用の実際と、「逃亡犯条例」が中台港の3者関係に波及した歴史的背景について香港研究者の立場から俯瞰する。第2-7章「台湾と中国の経済関係」(佐藤幸人)は、政治の陰に隠れがちな経済の角度から改めて中台関係の現在をみている。近年の中国の経済的プレゼンス拡大を念頭に着目されがちな「中から台」の経済進出のみならず、1990年代以降に拡大した「台から中」の投資関係は、現在なお見過ごせない中台関係のファクターであり続けている。

第3部の各章は、第1部と第2部を前提としてふまえつつ、〈台湾〉の現在を読み解くための先端的なキーワードについて取り上げている。第3-1章「台湾人アイデンティティ」(何義麟)は、植民地期から戦後につながるエスニック・フレー

ムの変遷を俯瞰する。日本とアメリカにおける「中華民国人」の「台湾人」化の例は遠隔地ナショナリズムとの比較上興味深い。第3-2章「多文化主義」（田上智宜）は、1990年代以降の本省／外省対立から「四大族群」フレームへの移行と、多文化主義理論の援用によるLGBTや外国籍労働者を交えたダイバーシティの思想としての新しい展開を述べる。第3-3章「台湾語映画」（魏逸瑩）は、1950年代以降の同ジャンルの盛衰を解説している。伝統劇や歴史記憶などのテーマを「台湾の言語」で表現したことは、体制的抑圧への内面的な鬱憤を晴らす拠り所として大きな支持を集めた。第3-4章「まちづくり（社区营造）の担い手のゆくえ」（星純子）は、台湾型まちづくり（社区营造）がもつ住民運動としての側面と公的政策としての側面という一見矛盾した両側面につき、「制度を利用する社会運動」という視点から議論している。第3-5章「慰安婦問題」（劉夏如）は、ジェンダー・暴力・記憶など普遍的テーマへつながる同問題について日韓台3者のフレームから光をあてる。劉は同問題に対して台湾社会が多声的な歴史へ向き合う際に活かしてきた「ふくざつなことをふくざつなままに」語るアプローチを手掛かりとして示す。第3-6章「移行期正義」（平井新）は、蔡英文政権下で着目される移行期正義（transitional justice）概念の台湾への導入の背景を解説する。本概念は国家暴力に対する「加害者なき謝罪と補償」の解決とともに、漢人系と原住諸族の間の「脱植民地化」の遂行をめざすキー概念としても機能している。第3-7章「台湾の政党政治と保守政党」（林成蔚）では、中華／台湾ナショナリズム以外の政策的差異が薄まり二大「保守」化する国民・民進両党の現況を論じる。急進的なナショナリズムを結集軸とした過去の第三党とは異なり、近年は社会正義を結集軸に集おうとする新たな政治的模索が見られるようになっていく。

第4部は日台の〈台湾研究〉の成長とともに活動してきたベテラン研究者2人による同時代史的台湾史論である。第4-1章「『台湾史』と『日本史』の交錯」（呉密察）では、呉が1980年代の留学中に国史（日本史）と東洋史をまたぎながら学んだ経験を語りつつ、新たな「帝国」分析の視点を提示する。それらは周縁の「帝国」の中心に対する逆規定のモーメントや、「帝国」の周縁同士との横の（しばしば誤解をはらんだ）連動に向けられた視点である。第4-2章「台湾における『若林台湾学』の受容」（許佩賢）は、本書の編者である若林が過去の諸著作で提示した日本による3つの台湾支配の枠組みの議論について再整理を行うとともに、この枠組みが1990年代以降の台湾の〈台湾研究〉へ与えたインパクトとリアクションを記す。

各章を締めくくりに〈台湾研究〉の来し方と行く「先」を展望するのが、第5部にあたる終章「台湾という来歴」を求めて——方法的「帝国」主義試論」（若林正文）である。若林は「台湾把握」のための歴史的な分析枠組みとして「鑿」——「諸帝国」による〈台湾〉の切り出し——と「網」——帝国間関係のもとでの〈台湾〉の位置づけ——という2つの軸を提示している。この枠組みは若林が本書の「はじめに」において提起した〈台湾研究〉が地域研究の技法として〈台湾〉をいかに「対象として把握」しうるかとの問いへの若林なりの直接的な答えであり、指針である。

ここまで見てきたように本書は〈台湾研究〉の最先端の成果集である。第一に、これまで適切な概説に乏しかったトピックへ単独の章節が割かれ、その動向が示されている。とりわけ「慰安婦問題」「移行期正義」など、その根は古いが2010年代の政治状況のなかで急激に意味を帯びてきたトピックは、他地域を対象に同テーマを研究する研究者にとっても問題把握の導きとなるであろう。また「歌」「祝日」のような対象としての〈台

湾〉を分析する新しい視角は、他のコンテキストから〈台湾〉をとらえようとする者に新鮮な示唆を与えてくれる。もちろん、法制・教育・政党・アイデンティティといった分厚い蓄積のある分野についても、ベテランと若手がそれぞれに最新の成果を補い合っている。「台湾人」でない「はず」の「在台日本人」が〈台湾研究〉のリストに入ったことなどは、〈台湾〉をめぐる主体形成の自問とともに〈台湾研究〉が自らも変容を遂げてきた端的なあらわれであろう。

冒頭でも記したように、本書はいわゆる〈台湾〉概説書ではない。よって全くの初学者に本書をすすめるのは難しい。本書の真価は、すでにして〈台湾研究〉へ踏み込んだ者がくぐる第二・第三の門としての価値にある。〈台湾〉の輪郭をまず「知る」ことから、自ら〈台湾〉なるものの輪郭を専門的に「探る」ことへステップアップするに際した導きの書といってもよい。また本書は〈台湾研究〉者としてすでに一定の深みにある者にとっても有用な書となるはずである。編者の若林も指摘する通り、〈台湾〉なる対象は複数のコンテキストが入り組んで構成されている。ゆえに〈台湾研究〉は常に複数のコンテキストから対象へ光を当てることを要求するのであって、そうした探究のあり方はベテラン・若手を問わない。本書は多岐にわたるコンテキストの束を示しながら、読者を自らの研究と潜在的に隣接した他のコンテキストへと誘ってくれる。

本書でわずかに残念に思われるのは、各章を貫く大きな主題の提示が、やや「隠し題」的に過ぎたのではないかという点である。たとえば〈台湾〉なる対象を描くとき、第二次大戦後の文化や政治経済に大きな影響のあった「アメリカ」や「東南アジア」についてほとんど触れられていないのは何故か。それらのファクターの代わりに「日本」と「中国」が大きなウエイトを占めるのは何故か。それはひとえに、〈台湾〉の主体形成が本書を貫

く大きな主題であるためである。本書におけるこの主題は「通奏低音」(p.iv)というよりも、むしろ主旋律ではなかったか。「日本」と「中国」が「〈台湾〉とは何か」の主体形成において特別な位置を占めていることは、日本や中国の〈台湾研究者〉にとり特記するまでもない前提としてしばしば納得できてしまう。けれども編者の若林が終章で示した「諸帝国」の「鑿」と「網」のアプローチにも通じるように、〈台湾〉なる対象は日台関係史・日中関係史においてのみ描き出しうる対象ではない。「日本」と「中国」をファクターとして自明視することなく、かつ同時にそれらの〈台湾〉に対する意味を非〈台湾研究〉へも伝わるように発信していくことは、これからの〈台湾研究〉が負うべき責務のように思われる。

〈台湾研究〉は〈台湾〉というローカルな場を舞台に普遍的な問いをラディカルに問うてきた。本書所載の各章も決してこのラディカルなエネルギーを失ってはいない。それは嘉すべきことである。一方で、これまでの〈台湾研究〉が学際的・領域際的に多様な知を他から取り入れてきたのとまさに同じように、これからの〈台湾研究〉が学際的・領域際的に自らの開拓した知を他へと発信していくことができるか。ノン・プロパーへそれをくぐるに値する「門」として〈台湾研究〉をアピールしていくことができるか。これらは引き続き追求められなければならない課題である。本書が背負う「入門」という題は、〈台湾研究者〉自らへ突き付けられた重い言葉でもあるのだ。

(2020年2月, 360ページ, 3,900円+税)